

「Ambarvalia」・「あむばるわりあ」

——西脇順三郎の沈黙——

村 田 美 穂 子

西脇順三郎の日本語による詩業は昭和の年号と同じほどの長さである。昭和八年に刊行された「Ambarvalia」を皮切りに、彼の詩集はすでに二三冊を数えている。

「Ambarvalia」は文学史の上で重要な存在であるが、刊行当時、果たして「Ambarvalia」が日本の詩壇にいかなる影響を及ぼしたのかは、すでに定かではない。しかし、今ふり返って、「Ambarvalia」は昭和の詩の美学を変えた。とまで評する向きもある。^(註一)しかし、この詩人にやがて訪れたのは沈黙であった。詩人の歴史の中でただ一度の大きな沈黙の時代である。それは昭和一〇年頃から約一〇年間に及ぶ。その頃、日本は詩人にとって良い時代ではなかった。戦時下におけるさまざまな統制は、西脇順三郎の詩作には不向きだったのである。詩人の四〇歳代のほとんどがこの時期にあたる。

やがて終戦、詩人の活動は再開した。そして昭和二二年に刊行されたのが、「Ambarvalia」の再版「あむばるわりあ」であった。この詩集は再版とはいえ、その実は明らかな改作であ

る。詳細で周到な改作なのである。そしてこれらふたつの詩集（初版と再版）が、西脇順三郎の沈黙の何であったかを雄弁に物語ることとなるのであった。

沈黙の一〇年間、西脇順三郎は詩作をしなかった。しかしこの間に、詩人はふたつの収穫を得たのであった。

「Ambarvalia」の詩人は、この時期、ひとりの文学者として自らの研究に没頭した。「古代文学序説」執筆のときである。この論文が当時の詩人の思いを伝えてくれる。「幻影の人」という副題をもつこの論文は、古代・中世ヨーロッパの文学論で、戦闘における武人の倫理や死の問題から、思想や信仰を超えてヨーロッパ文学を貫いているものの何であるかを明らかにしようとしている。そして「幻影の人」がその正体だという。「幻影の人」とは、人間が無意識のうちに持っている人生観に象徴される。それは、死が生の必然であるという、最も原始的な人生観であろう。このような「幻影の人」を、西脇順三郎はヨーロッパから採り出した。この発見が収穫のひとつである。

もうひとつの収穫は、昭和一九年から一年足らずの疎開生活（郷里の新潟県小千谷市）において得られた。このとき詩人は、初めて日本の古典に親しみ、水墨画を描き、故郷の野をめぐり歩いた。そこで詩人の目をひいたものは、道端や藪に繁る多くの雑草であった。植物という生命体の、土の上に生き、死んでゆく姿を、詩人は人間の運命の象徴的なあり方として具体的ににとらえたのである。このことは、詩人の内にある「幻影の人」の発見であった。文学といえは、ヨーロッパの文学にしか親しかなかった詩人であったが、文学はその根本においては、ヨーロッパも日本も同様に「幻影の人」に支えられていたのである。生あるものにとって死が必然であるということを、「幻影の人」はいつもささやき続けているのだった。

これらふたつの収穫は、従来のヨーロッパ一辺倒のエキゾチシズムから詩人を解放した。結果は、東洋へ、日本へのいわゆる精神的回帰である。詩人自身の中に「幻影の人」がいるのであり、詩人自身が植物同様の土の上の生命なのである。それならばもう、舞台はヨーロッパでなくても良いのであった。

「Ambarvalia」には、その冒頭に「コリコスの歌」という序詩がある。これは古代の詩人達がその作品の冒頭などで芸術の女神ミューズを讃えた形式に倣ったもので、「浮き上れ、ミューズよ」とミューズに呼びかけた四行詩である。ヨーロッパ文学から詩作の道に入った西脇順三郎は、自らの日本語による処女詩集にも「Ambarvalia」（穀物祭）の意）というラテン語の表題を掲げ、更にミューズの名を呼び、ヨーロッパの息吹きを

持ち込んだのであった。西脇順三郎が「Ambarvalia」において示した意気込みは、このようにその内容に触れる前に、すでに表題と序詩「コリコスの歌」の存在とによって容易にうかがい知ることができる。

しかし再版では、表題はひらがな表記に改められ、序詩「コリコスの歌」は削除された。この削除は重要な意味をもつ。「Ambarvalia」全編が大幅に改作された中で、この削除は看過されがちであるが、この変化のもつ意味は決して小さくない。ミューズへの呼びかけをもはや不要のものとした西脇順三郎の姿には、日本語で詩作することをためらい続けたかつての詩人の面影はすでないからである。西脇順三郎の詩人としての魂は、こうしてようやく東洋へ、日本へと帰って来たのであった。このことはしかし、西脇順三郎とヨーロッパとの訣別を意味するだろうか。ミューズへの献辞を削除したからといって、詩人は、実は何物をも捨てはしなかったからである。詩人の中からヨーロッパは消えなかった。これはその後の詩人の詩業が物語るところである。つまり、「Ambarvalia」の改作である「あむばるわりあ」は、詩人のヨーロッパそのものであった「Ambarvalia」と、東洋、日本との対話の詩集ではなかったか。「Ambarvalia」の一言一句までが改作の対象となり、「ミカン色」（Ambarvalia「風のバラ」）を「蜜柑色」（あむばるわりあ「巻雲」）と改める等の細心さまでみせる「あむばるわりあ」は、まさに「Ambarvalia」と西脇順三郎との対話の書だったのである。

「Ambarvalia」の詩人と「あむばるわりあ」の詩人は、十数

あむばるわりあ「林檎と蛇」14

年という沈黙の時間の中に、改作・再版という作業に名を借りて静かな対話を展開した。その対話のあとを、つまり改作の具体例をつぶさに挙げることは今できないが、「Ambarvalia」の「旅人」という作品をめぐって少々考えてみようと思う。

汝カンシヤクもちの旅人よ

汝の糞は流れて、ヒベルニヤの海

北海、アトランチス、地中海を汚した

汝は汝の村へ帰れ

郷里の崖を祝福せよ

その裸の土は汝の夜明だ

あけびの実は汝の靈魂の如く

夏中ぶらさがつてゐる

Ambarvalia「旅人」

旅人よ

汝は汝の村へ帰れ

郷里の崖を祝福せよ

その裸の石は

汝の夜明けだ

あけびの実が

汝の靈魂の如く

夏中

ぶらさがつてゐる

改作のこの部分では、ヒベルニヤ（注3）（アイルランド）も北海もアトランチスも地中海も消えた。しかし、その点以外の変化は小さい。他の作品の改作と比較すれば、この改作の異同は少ない部類に入る。だが、「あむばるわりあ」を読みすすむ我々の目前に、もう一度この「旅人」は現われる。

旅人よ帰れ

汝の国境の山々に

今頃は

すすきが穂を出してゐる

あむばるわりあ「肩車」V最終部

これは思いがけない出現である。「Ambarvalia」から「あむばるわりあ」への改作では、作品の配置もかなり入れ替わった部分があるが、すでに改作された作品が改めて改作されて登場するという、この「旅人」のような例は他にはない。つまり、「肩車」のこの部分はもはや改作ではないのである。改作ではなく、「ヴァリエーション」^(注4)なのだ。そしてこの部分が「あむばるわりあ」一巻の最終部分であることを思い合わせるとき、改作を終えようとする西脇順三郎の現在がそこにあることに気づく。「すすき」は「Ambarvalia」には一例もない。この「国境の山々」は、すでにヨーロッパから解放された詩人のもので

あるう。改作の筆を置こうとする詩人は、秋の深まりを知らせる、いかにも日本人好みの「すすき」を登場させて、「Ambarvalia」との対話をしめくくったのである。

「コリコスの歌」の削除に始まり、「旅人」の「ヴァリエーション」に終わる「あむばるわりあ」は、^(註6)「一般には「Ambarvalia」の詩の世界の衰退を示す書として評価は低い。しかしこれらふたつの詩集を並べてみると、「あむばるわりあ」に積極的な意味があることは明白である。西脇順三郎が獲得した東洋、日本というものは、すべてここにその原点があるからである。

「あむばるわりあ」所収の「雨」に、「この白金の絃琴の乱れの／女神の舌は」という部分がある。ここにみられるような、格助詞「の」の連用は、「Ambarvalia」にはなかった。そして後に西脇順三郎の得意手となる用法である。

精霊の水の眠りのオフィーリアの水苔の
砂丘のはまなでしこのはまゆうの女の

^(註6)
失われた時IV部分

この例のように「の」は、後にヨーロッパをも、東洋、日本をもないませる効果をあげるようになった。

「の」について、詩人は語る。

日本語の最大なものは、のつかい方、(中略)の、これだけの自由、日本人でなければわからないものをもっている

る。のは英語ならオプ、フランス語はドゥだけれども、みすばらしいものですよ。

^(註7)
「詩人と小説家」より

このような日本語の発見の素地もまた、「あむばるわりあ」にあるのである。「Ambarvalia」において明解に示された詩の世界は、ヨーロッパのみが強調されているという点で、西脇順三郎の詩の世界全体の半分であったといえる。しかし、沈黙の後、東洋へ、日本へと回帰した詩人は、「あむばるわりあ」において初めて、ヨーロッパをも、東洋、日本をも、こだわりなく自分の世界とすることができたからである。

注1 加藤郁乎「別冊一億人の昭和史・昭和詩歌俳句史」

毎日新聞社・一九七八年

2 西脇順三郎は「Ambarvalia」刊行以前に英語、フランス語、ラテン語で詩作している。日本語による詩作は和歌、俳句の形式を踏襲しなければならないという思いこみがあったためである。エッセイ「脳髓の日記」(「剃刀と林檎」所収)参照。

3 ここで消えた部分の改作は、あむばるわりあ「巻雲」最終部に置かれている。ひとつの作品が改作の際に分けられて、それぞれが別の部分に収められるという、このような例は、他にもみられる。

4 詩集「鹿門」(一九七〇年刊)に四行詩一七編を連ねた「ヴァリエーション」という作品がある。この一

七編はすべてそれまでの西脇順三郎自身の作品のヴァリアントであり、これに類する手法は他にもみられる。「肩車」Vの引用部分は、その例の初めである。

5 古くは北園克衛著『旅人かへらず』への手紙（一九四八年）、近くは鍵谷幸信著「西脇順三郎論」（思潮社・一九七一年）に代表される。

6 一九五九年刊。

7 一九七一年七月、武田泰淳との対談。

底本

定本 西脇順三郎全詩集（筑摩書房・一九八一年）

西脇順三郎対談集（薔薇十字社・一九七二年）

付記 西脇順三郎には、「あむばるわりあ」と同時刊行された詩集「旅人かへらず」がある。この詩集は西脇順三郎のいわゆる精神的回帰の結果を明瞭に物語っているといわれる。しかし詩人の沈黙による変化と意味を明らかにしようとする場合、表題に掲げたふたつの詩集によることが妥当であると考えた。

西脇順三郎の詩の世界を大づかみに把握することは、拙稿「西脇順三郎世界」と「詩人像・西脇順三郎」（学習院大学哲学会誌第五号・一九八〇年、同誌第六号・一九八一年掲載）において試みたので、ご参照いただければ幸いである。